

ASCO 2010 gastrointestinal symposium の印象

今回2年ぶりに ASCO 2010 gastrointestinal symposium に参加させていただいた。大規模臨床試験の発表はやや少ないものの、多くの注目される試験結果の報告があった。

このなかでは、日本人発表として ToGA trial の QOL 調査結果が、近畿大学の佐藤太郎先生により口演されたことは、われわれ日本人研究者にとっても大いに喜ばしく、また刺激となった。この発表は多くの聴衆の注目を集めたが、QOL の評価は難しい事が再確認される結果であった。

また治療抵抗性の切除不能進行再発大腸癌に対するベバシズマブ+mTOR 阻害剤エベロリムス療法の治療成績が Altomare 先生から発表された。本試験は 2009 年に発表されており、今回は症例数が 50 例に増え、その解析結果の発表であった。主にベバシズマブ治療での増悪症例を対象にベバシズマブ+エベロリムス療法の腫瘍抑制の検討であった。結果、奏効例 (CR、PR) は確認できなかったが、全体の病勢コントロールの中央値は 2.6 カ月、SD および MR (Minor Response) 症例に限れば 6.1 カ月というよい結果であった。また 3 例において 350 日間以上の治療継続が確認され、標準治療の残されていない患者さんにおける治療選択肢となる可能性、またエベロリムス併用によるベバシズマブ耐性克服の可能性などが推察された。従来、分子標的薬剤を複数併用する試験の多くが否定的な結果の報告であったことを考えると、非常に意味深い結果であったと思われた。

今回も gastrointestinal symposium は東海岸のオーランドの地での開催であったが、ヨーロッパの参加者に負けない数の日本の研究者が参加していた。2011 年の開催が西海岸のサンフランシスコになったのはこういった状況も考慮されたのであろうか？ 次回の symposium が楽しみである。